

9/9(金)

【分科会 21】東日本大震災 ～被災体験とその支援から学ぶ～

出演者：内海章友（地域生活支援センターそら）／須藤康宏（相馬フォロアーチーム）
黒田大介（岩手日報学芸部記者&盛岡ハートネット事務局）
阿部宏史（静岡県立こころの医療センター）
座長：後藤雅博（新潟大学）

本分科会は、2011年3月11日に発生し太平洋沿岸を中心に大きな被害をもたらした東日本大震災とそれに伴う福島第一原発の事故により、苦しい状況に置かれた当事者、家族、支援者、その他の関係者が、今必要としていることや求めること、そして支援のあり方や復興のあり方についてイメージを共有することを目的とし、事務局主催で開催された分科会であった。

内海章友さんからは、震災直後の被災地の避難所の凄惨な状況、その後の東京での避難生活が語られた。途中、涙に言葉をつまらせる場面もあり、フロアの聴衆のみならず、マイク係のスタッフも目頭にハンカチを当てる光景が見られた。避難所での体験から「聴くことの力」を感じられたこと、現時点での復興のイメージを持つことの難しさなどが語られた。

須藤康宏さんは、震災時、福島第一原発から30キロ圏内に位置する小高赤坂病院（現在は閉院）で臨床心理士として勤務されており、震災直後の混乱する中での避難の様子、その後の崩壊してしまった地域精神科医療福祉の“新生”に向けて設立されたNPO法人相馬フォロアーチームについて語られた。今なお収束しない原発事故と錯綜し続ける情報、将来の見通しが立たない中で、模索する状況を伺った。

黒田大介さんは岩手日報の記者の傍ら、精神障がいをもつ当事者、家族、関係機関、市民のゆるやかなネットワークである「盛岡ハートネット」を設立し、事務局を務める。記者として、家族として、取材し経験したことが豊富な資料を用いて語られた。また、被災住民と支援者の協働の重要性、人と人のつながりの必要性、経済的支援の重要性、マンパワーの不足、長期化が必至の仮設住宅でのコミュニティ形成の課題など、具体的な提言と今後の課題を述べられた。

阿部宏史さんは、静岡県立こころの医療センターの精神科医であり、以前は岩手県立南光病院に勤務していた。震災後、静岡県こころのケアチームの一員として宮古市に数回入って支援活動をし、その支援活動を通して感じた支援者の心構えのあり方から薬剤処方の実際といった具体的な支援の経験にいたる様々な内容を語られた。

質疑応答では、被災県より来場された参加者からの共感の言葉や、支援したいがどうしていいのかわからないといった被災地外からの参加者の声が聞かれ、座長の後藤雅博によって、中越地震の経験などを踏まえながら進行した。復興のイメージ共有という話題には至らなかったが、被害の大きさ、深さ、多様さが改めて浮き彫りになり、本震災を風化させず長期的に注目しつづけること、息の長い柔軟な支援の必要性が確認された。

《園環樹（株式会社シロシベ）》